

私を支えてくれた読書

上野千鶴子著『女は世界を救えるか』 勁草書房・他

お 兄ちゃんはずるい」という妹の

抗議を受けて、田舎の実家に戻り、そこから大学院に通うことに決めたのは、博士課程の時だった。それまで、家のことはすべて二人の妹に任せっきりだったのだが、これからは担当交代で、私が病弱

の母をアシストしながら、年配の祖母、家事のできない父と生活することにした。なにしろ、大学院生には時間だけはたっぷりあったので。

家事をすること自体に抵抗はなかった。料理や買い物は好きだったし。ただ、「いい年をした大の男」が平日の昼間に毎日のようにスーパーで買い物をしていても、人目を気にしたり惨めな気持ちになったりせずにすんだについては、フェミニズムの理論から精神的支えを得ていたのだと思う。とりわけ、当時ジャーナリズムの世界で発言を開始しておられた上野千鶴子さんの存在は、圧倒的に大きかった。その処女（喪失）作



『セクシィギャルの大研究』もおもしろかったが、それ以上に知的にスリリングで実践的にも有益だったのは、雑誌に次々と発表される論文だった。彼女の論文は、目につくかぎりすべてコピーして読んだ。それらは、後に『女は世界を救えるか』『女という快楽』に取められることになった。

その後も、上野さんは一貫して多産で、その作品のすべてを読むという風にはいかなくなったが、つい最近出版された『サヨナラ、学校化社会』『サ・フェミニズム』などをみても、単に鋭いというだけでなく、何度も爆笑せずには読み進めることのできない、愉快な本たちだ。



藤野 寛 (ふじの・ひろし)

経済学部助教授。

5年9ヶ月に及んだドイツ留学時代は、せっせと自然にいそしんだ。レポートはもっぱら和食だった。同じ下宿の住人たちとくに好評だったのは、胡瓜の酢の物だった。「おまえのキュウリサラダは世界一だ」とかおだてられながら。そういうわけで、哲学者としての認知はさっぱりだったが、料理人としてはなかなか高い評価を得ていたのだった。